

## 第2章 ジャナ・バハのストゥーパ

### 1. 序

カトマンドゥの旧市街であるケール・トール地区 Kel Tole にあるジャナ・バハ Jana Baha は、ネパール仏教において盛んな観音信仰の四大霊場の一つであり、セト・マツェンドラナー ト Stomatsendranāth と呼ばれる観自在菩薩を奉った仏教寺院である。中庭を囲む四角形の建物であり、中庭の中心には本堂が位置している。この本堂の回りには、仏像、菩薩像、マンダラ台、ターラー Tārā を載せた柱などがあるが、最も多数配置されているのがストゥーパである（写真 3, 4）。J. Locke は中庭にあるこれら建造物を簡潔に報告し、その位置関係を概念図によって示した<sup>(1)</sup>。彼の報告の中で十分触れられなかったジャナ・バハのストゥーパは、ネパールに於けるストゥーパの構造の特徴をよく表している<sup>(2)</sup>。本稿はこのバハのストゥーパを、外観に関する構造に焦点を当てて報告しようとするものである。

### 2. ストゥーパ概観

ストゥーパとは元来、釈尊の遺骨を祀ったものであり、非常に大きく、単純な土饅頭の形をしており、釈尊の到達した永遠の寂靜の世界を表すと考えられた。ストゥーパは、釈尊の達した「悟り」と「束縛からの離脱」とが持つ多面性を宇宙論的シンボリズムで表している<sup>(3)</sup>。即ち、その覆鉢部 (anda) は、生じ、滅し、そして再生する一切を含む宇宙 (宇宙卵) を表象し、覆鉢の上に設けられた方形段のような平頭 (harmika) は、「宇宙」の上に位置する聖壇を表す。ネパールのストゥーパでは、この平頭に人間の眼を描くことが多い。これは、ネパールのストゥーパが人間の姿、特に定に入った本初仏 Ādibuddha の姿を表象していることを示す<sup>(4)</sup>。即ち、平頭は頭を、覆鉢は肩までの身体を、基壇は結跏趺坐に組んだ足を意味している。このシンボリズムは、ネパールに住むチベット僧がストゥーパ (チョルテン) を建てる場合、中心に柱を立て、その柱に印された色糸の節目は、五つのチャクラ (cakra, 神経叢) である頭、喉、心臓、へそ、生殖器を表すとされている点にも見られる<sup>(5)</sup>。チャクラは、日常的経験という下位の心的状態から日常的経験を脱した悟りという上位の心的状態にいたるまでの諸々の心的状態と結びついている。ネパールのストゥーパは、宇宙論的シンボリズムとチャクラに結びついた心的諸状態についてのシンボリズムとをになっている<sup>(6)</sup>。

ストゥーパは少なくとも紀元後一世紀にはチャイトヤ (caitya) とも呼ばれていたが<sup>(7)</sup>、本来は別々のものであった。チャイトヤとは釈尊の時代以前には、聖火壇、犠牲獣を結わえる祭柱 (yūpa), 人肉を要求するとされるヤクシャ Yakṣa やラクシャス Rakṣas 等の精霊のすむ処、そ

れらが宿る聖樹、或は火葬場、墳墓、記念すべき場所であったと思われる<sup>(8)</sup>。『家庭経』の一つである『アシュヴァーラヤナ・グリフヤ・スートラ』 *Āśvālayana Gṛhyasūtra* I, 12, 1-2に、「到達するのが困難である場合には木の葉に供物を載せておいてもよい」と述べられており<sup>(9)</sup>、チャイトヤは居住地区から離れたところにあったことが想像される。特に聖樹としてのチャイトヤに人々は恐怖、畏怖を抱き、一方では、そこに宿る精霊の力に対して祈願を行った。チャイトヤへの信仰は特に聖樹の観念を通してストゥーパと結び付いた<sup>(10)</sup>。このことは、巨大ストゥーパの覆鉢 (*aṇḍa*) の頂上に建てられた支柱 (*yaṣṭi*) が聖樹としてのチャイトヤに形態的に近いことから窺える。

ストゥーパは初期においては巨大な覆鉢型をしていた。紀元前2世紀から1世紀頃に開かれたパージャーヤ紀元後2世紀前半に開かれたカールラーの仏教石窟寺院にあるチャイトヤ窟の内奥にストゥーパが設置されたことから判明するように<sup>(11)</sup>、ストゥーパの小型化が起こった。しかし、初期のストゥーパと同様に、覆鉢部や基壇に装飾はなかった。クシャーン朝(紀元後1-4世紀)の時代には、基壇に仏像や装飾のあるものが出現した。そして、基壇は鼓胴部とそれを支える基壇部分とに分かれていった。鼓胴部の下にあった円形の基壇部分が方形で高くなり、ストゥーパは覆鉢部の上にある幾重もの傘蓋によって「上昇性」をはっきり示すようになった。逆に覆鉢部は退化していった<sup>(12)</sup>。パーラ朝(紀元後8-12世紀)では、鼓胴部・基壇部分ともに高く、釣鐘型の小ストゥーパ(奉獻小塔)が出現した。そして、しばしば基壇部分には突出部分が設けられた<sup>(13)</sup>。

現在カトマンドゥには、巨大な覆鉢のストゥーパと小ストゥーパとの両者が並存している。前者は「ストゥーパ」と呼ばれ、後者は「チャイトヤ」と呼ばれるが、この名称による区別は形態に基づくものに過ぎない。巨大ストゥーパには、スヴァヤンブーの塔、ボードゥナートの塔、アショーカ王の建立によると言われている塔がある。小ストゥーパには、寺院等の中庭にみられるストゥーパがある。

### 3. ジャナ・バハのストゥーパ

ジャナ・バハの本堂自体も層塔形式のストゥーパである。この本堂の回りにある34のストゥーパはすべて奉獻小塔であり、チャイトヤと呼ばれている。ストゥーパの最も上にある宝珠、その下の相輪 (*chattra*)、平頭、覆鉢は小さく、装飾の中心はそれらの下に続く鼓胴部や基壇部分(以下「基壇」とのみ略称する)にある。相輪下部の四方にある蓮弁には、金剛界マンドラの四仏のシンボルが描かれている。東に阿閼の金剛杵、南に宝生の宝珠、西に阿弥陀の蓮、北に不空成就の二重金剛杵 (*viśvavajra*)<sup>(14)</sup>である。鼓胴部はほとんどの場合、方形の「方胴部」となっており、屋根のような張り出しや突出部分も幾重にも重なっているものが多数ある。バハの34のストゥーパを、外観の違いによって、10種類に分類することができる。この10種に分類されたストゥーパの中で代表的なもの1個ずつに、以下の記述の中で基本的構造を持つものとして言及しておいた。

但し、この10種は第4節で触れられる、ネパールにおけるストゥーパの伝統的区分とは必ずしも一致しない。34のストゥーパは以下のごとくであり、カッコ内の番号は図2中に示されたストゥーパの番号である。

(3) 覆鉢部の四方には、合掌した仏(東)<sup>(15)</sup>、定印の阿弥陀(南)、右手に金剛杵を持ち、左手に鈴を持つ金剛薩埵 Vajrasattva(西)、右手で与願印を示し、左手で扠子(cāmara)を胸の位置に持つ仏(北)<sup>(16)</sup>が坐している。(以下、仏の持つ扠子は常に胸の位置にある。) 四維には各仏の妃が<sup>(17)</sup>両手に蓮を持って、右手で与願印を示し、遊戯坐で坐している。覆鉢の下には三重の蓮台がある。その下の方胴部には金剛界マンダラの四仏が坐している。この四仏は覆鉢部の仏よりはるかに大きく、ストゥーパの中心的存在であるかのごとき印象を与える。(写真29, 30, 31, 32) 東に触地印の阿閼、南に与願印の宝生、西に定印の阿弥陀、北に施無畏印の不空成就がいる。仏の下に、各々の乗り物である象(東)、馬(南)、孔雀(西)、ガルダ鳥(北)がいる。これらは二頭ずつ配されており、その間には増長天 Virūdhaka(東)、持国天 Dhṛtarāṣṭra(南)、毘沙門天(多聞天) Vaiśravaṇa(西)、広目天 Virūpakṣa(北)<sup>(18)</sup>がいる。この下には大きな蓮台があり、皿を伏せた形をした台によって支えられている。

突出を持つ方形の段が続き、突出部にはデーヴァナーガリー文字で観自在の真言である「オン、マニ、パドマ、フーン」(Om maṇi padma hūṃ)が書かれている。突出部でない所には、吉祥を表す八つもの(八瑞相)、即ち、吉祥結、妙蓮、宝傘、ほら貝、金輪、勝利幢、宝瓶、魚<sup>(19)</sup>が描かれている。さらに下には方形台がある。四隅には獅子が彫られ、四方には、右手で与願印を示し、左手で扠子を持つ仏(東)、蓮を持つ右手で施無畏印を示し、左手で与願印を示す観自在(南、北)<sup>(20)</sup>、右手で与願印を示し、左手で蓮を持つ観自在(西)が配されている。台の下には取り巻くようにして蛇がおり、その頭は北を向いている。ストゥーパのこのような構造はジャナ・バハのなかでは基本的なものの一つである。

このストゥーパの高さは約205cm、基壇の一辺は142cmである。すぐ西には石碑があり、ネパール暦(Nepal Samvat) 1011(紀元1891年)の年が記されている。

(4) 覆鉢部の下に二重蓮華座があり、その下の方胴部には、小さな張り出し部分が三重にある(写真33)。ここに、(3)のストゥーパに見られた金剛界マンダラの四仏が龕に納められて現れる。さらに、大きな張り出しが二重になっており、あたかも大小の屋根のごとくに見える。下の張り出しの方が大きい。その下には一仏と三観自在が立っている。東面には、右手で与願印を示し、左手で扠子を持つ宝冠仏、南と西の面には、両手で蓮を持ち、右手で与願印を示す観自在、北面には両手で蓮を持って、合掌する観自在が配されている。

このストゥーパは(3)とは異なる基本的構造を有している。高さは約115cm、基壇は一辺が76cmである。建立の日付は見あたらない。

(5) 相輪の上部は欠落し、覆鉢部の四方には阿閼(東)、宝生(南)、阿弥陀(西)、不空成就(北)が配されている(写真34)。覆鉢部の下には二重蓮華があり、その下には魚の鱗の様な模様が続き、それを蛇が支えている。蛇の頭は北を向いている。さらにその下には、八角形の屋根に

似た張り出しが二重にあり、その下の八角形の方胴部には一仏と七観自在の立像が一面に一人ずつ配されている。東面の仏は左手を胸の位置に保って扠子を持ち、右手は与願印を示している。南と西の面の観自在は両手で蓮を持ち、右手で与願印を示している。北面の観自在は両手に蓮を持って合掌している。四維の観自在はすべて両手で蓮を持ち、右手で与願印を示し、左手で施無畏印を示している。このストゥーパの構造は基本的なものの一つである。高さは約118cm、八角形の基壇の一辺は30cmである。建立の年は記されていない。

(8) このストゥーパの構造は(4)のストゥーパと同様である。尊容は(5)のストゥーパに見られる四方の仏及び観自在と同じである。ストゥーパの高さは約123cm、基壇の一辺は80cmである。建立の年は記されていない。

(12) 構造は(4)のストゥーパと同様である。ただ、方胴部南面と西面の観自在の与願印をした右手に蓮はない。また、四面に仏及び観自在を配した方胴部の下にさらに基壇があるという点で異なっている。ストゥーパの高さは約165cm、基壇の一辺は119cmである。建立の年は記されていない。

(13) このストゥーパの構造は(4)に近い。方胴部の下部の装飾はあまりなく、極めて素朴な外観を呈している(写真35)。覆鉢部の下に龕に納められた四仏がそれぞれの方角に配されている。その下には、(4)とは違って、張り出しはあるが屋根のように見えない。方胴部の四面にも四人の仏の立像が龕の中に納められているが、破損のため印相等は明かではない。ストゥーパの高さは約198cm、基壇の一辺は139cmである。ネパール暦1039年(紀元1919年)に建立が始まり、1040年(紀元1920年)に終わったと記されている。

(15) 覆鉢部の下に、龕に納められた四仏がそれぞれの方角に配されている(写真36)。その下に一重の蓮台があり、さらに、五重の段が設けられている。基壇の東面中央には仏足があり、右にガネーシャ Gaṇeśa (聖天)、左にマハーカーラ Mahākāla (大黒)がいるが、他の三面には何か配せられていた形跡があるものの現在は何も残っていない。ストゥーパの回りには木の柵が設けられ、その上に22箇の燈明を点けられるようになっている。このストゥーパの構造は基本的なものの一つである。ストゥーパの高さは約225cm、基壇の一辺は176cmである。建立の年は記されていないが<sup>(21)</sup>、本堂正面を中心としてこのストゥーパと対称的な位置にある同型のストゥーパ(33)と対を成すものとして建てられた可能性がある。

(16) このストゥーパの構造は(4)と同じである。方胴部の四面には仏と観自在の立像が龕に納められて配置され、東の仏の手及び南と西の観自在の手は(5)のストゥーパの三方の仏及び観自在と同様である。北面の観自在は左手で施無畏印を示し、右手をその後ろに添えている。ストゥーパの高さは約156cm、基壇の一辺は111cmである。建立の年は記されていない<sup>(22)</sup>。

(17) このストゥーパの構造は(4)に近いが、装飾が(4)よりはるかに少なく、素朴さが目立つ。外見は(13)に近い。覆鉢部の下には四仏がいる。方胴部には仏及び観自在が配せられ、(3)のストゥーパにあるデーヴァナーガリー文字段の下の仏及び観自在と同様の尊容である。ストゥーパの回りには木の柵があり、その上に燈明をつけられるようになっている。ストゥーパの

高さは約187cm、基壇の一辺は141cmである。ストゥーパの南面の左に石碑があり、ネパール暦1051年（紀元1931年）の記録がみられる<sup>(23)</sup>。

(18) 構造は (4) のストゥーパと同様である。但し、方胴部の東面の仏は宝冠仏ではない。また、南と西の観自在は右手に蓮を持たず、また、北面に立つ観自在の蓮を持つ両手は合掌に近いが、破損しているために不明である。ストゥーパの高さは約183cm、基壇の一辺は126cmである。建立の年は記されていない。

(19) 構造は (3) のストゥーパと同様である。但し、デーヴァナーガリー文字の下の段に配された仏と観自在の中、南面の観自在は右手で与願印を示し、左手で蓮を持ち、北面の観自在は両手に蓮を持って合掌しているという点で (3) と異なっている。また、蛇の下の段の四方には金剛杵が彫られている点も異なっている。ストゥーパの高さは約225cm、基壇の一辺は180cmである。建立の年は記されていないが<sup>(24)</sup>、本堂正面を中心としてこのストゥーパと対称的な位置にある同型のストゥーパ (27) と対を成すものとして建てられた可能性がある。

(20) 覆鉢部の下に二重蓮華座があり、その下に屋根に似た張り出しがあり、そして方胴部が続く。方胴部の最上の東面では、中央に阿闍が坐し、その両脇に供養者が一人ずつ描かれている。この三者のみは方胴部の突出部に描かれている。以下の三面においても四仏と供養者は突出部に描かれている。東面の突出部の右外側（突出していない部分）には、右手で与願印を示す（左手不明）仏が、左外側（突出していない部分）には合掌する仏が坐している（写真48を参照。但し、写真はストゥーパ (58) のものであり、写真50, 52, 54も同様である）。南面突出部では中央に宝生が坐し、両脇に供養者が一人ずつ描かれている。右外側には右手で与願印を示す（左手不明）仏が、左外側には右手で施無畏印 (?) を示す仏が坐している（写真50を参照）。西面では中央に阿弥陀が坐し、両脇に供養者が一人ずつ描かれている。右外側には幢を持つ仏が、左外側には合掌する仏が坐している（写真52を参照）。北面では中央に不空成就が坐し、両脇に供養者が一人ずつ描かれ、右外側には定印の仏が、左外側には合掌している (?) 仏が坐している（写真54を参照）。これらの仏たちの少し下にある突出部には四仏の小さな妃が<sup>(25)</sup>彫られている。

四妃の下の方胴部は上の方胴部より大きく、突出部にのみ仏または観自在が立ち、その両脇には（突出部でない面に）坐仏が二人ずつ上下に配されている。東面の突出部の仏は右手で与願印を示し、左手に払子を持っている。その両脇に上下に配された坐仏は阿闍である。南面の突出部の観自在（印相と持ち物は不明）は両脇を上下に並んだ宝生によって囲まれている。西面の観自在は右手で与願印を示し（左手の持ち物不明）、両脇には上下に並んだ阿弥陀がいる。北面の観自在は右手で与願印を、蓮を持った左手で施無畏印を示している。両脇には上下に並んだ不空成就がいる。

この方胴部の下に三重の段があり、その下に基壇がある。基壇の東面には、結跏趺坐で四臂 (?) の合掌した尊格（他の二臂の右手に数珠、左手に経函？）が、南面と西面には遊戯坐で三面六臂の、妃を抱く尊格（右の一臂は与願印）が龕に納められている。西面の尊格は、右の三臂中の一臂で、剣を持っている。北面では右手で与願印を示し、左手で払子を持つ仏が龕の中に立ってい

る。

このストゥーパの構造はジャナ・バハの中で基本的なものの一つである。ストゥーパは正方形の鉄柵で囲まれ、柵の上には燈明をともすための皿が108箇設けられている。高さは約222cm、基壇の一辺の長さは170cmである。建立の年は記されていない。

(21) このストゥーパの構造は (3) のストゥーパと同じである。但し、覆鉢部には四人の妃はおらず、四人の仏のみである (写真37, 38, 39, 40)。合掌した仏 (東)、定印を結んだ阿弥陀 (南)、金剛薩埵 (西)、両手で施無畏印を示す仏 (北) である。さらに、デーヴァナーガリー文字のすぐ下の段に配された仏と観自在は、西の観自在を除いて (5) のストゥーパのものと同じである。西の観自在の右手に蓮はない。ストゥーパの回りには鉄柵があり、その上には燈明のための皿が48箇ある。ストゥーパの高さは約177cm、一辺の長さは127cmである。建立の年はネパール暦1070年 (紀元1950年) と記されている<sup>(26)</sup>。

(22) 構造は (3) のストゥーパと同様であるが、覆鉢部の尊格は (21) の覆鉢部のものと同じであり、妃はいない。さらに、デーヴァナーガリー文字の下段に配された仏と観自在は (21) のストゥーパと同じである。但し、西面の観自在は右手に蓮を持っていないが、修復の跡があるので、蓮を持っていた可能性がある。基壇の西面には、六人の合掌した人の坐像が彫られている。これらはこのストゥーパを建てた供養者を表したものと思われる。ストゥーパの高さは約165cm、基壇の一辺の長さは122cmである。建立の年は記されていない<sup>(27)</sup>。

(23) 構造は (3) のストゥーパと同様である。覆鉢部の尊格は (21) の覆鉢部のものと同様の仏が坐している。蛇の上段の仏と観自在は (5) と同じである。北面の観自在は合掌に近い形で、蓮を持った両手で施無畏印を示している点で (5) と異なる。蛇の下段の四面では、中央に華に似たものが描かれている。ストゥーパの高さは約181cm、基壇の一辺は123cmである。建立の年は記されていない。

(24) 構造は (3) のストゥーパと同様である。覆鉢部の尊格は (21) の覆鉢部のものと同じである。(3) で八瑞相と文字がみられた段に相当する段では何も描かれておらず、修復の跡がみられる。その下段には四面全ての中央に、同じ観自在が立っている。即ち、右手で与願印を示し、左手で蓮を持っている。基壇の西面の左半分に七人の合掌した供養者の坐像が、三人、二人、二人の組にして彫られている。ストゥーパの高さは約163cm、基壇の一辺は123cmである。ネパール暦1070年 (紀元1950年) の記録がみられる<sup>(28)</sup>。

(25) 構造は (3) のストゥーパと同様であり、覆鉢部の尊格は (21) の覆鉢部のものと同じである。また、デーヴァナーガリー文字の下段では四面全ての観自在の尊格は (24) の観自在と同じである。基壇の西面には左端から碑文、四人の合掌して坐した供養者、三人の供養者、二人の供養者と続く。このストゥーパの高さは約178cm、基壇の一辺は128cmである。建立の年はネパール暦1070年 (紀元1950年) と記されている。

(26) 構造は (3) のストゥーパと同様であるが、覆鉢の尊格は (21) の覆鉢のものと同じである。デーヴァナーガリー文字の下段の中央に立つ四面の観自在は (24) の観自在と同じである。

ストゥーパの回りには鉄柵が設けられ、その上に108箇の燈明がつけられるようになっている。このストゥーパの高さは約166cm、基壇の一辺は138cmである。建立の年は記されていない<sup>(29)</sup>。

(27) 構造は(3)と同じである。但し、覆鉢部の四人の妃はすべて右手で与願印を示し、左手で蓮を持って施無畏印を示しており、遊戯坐で坐している。基壇の四面の中央にはすべて金剛杵が描かれている。このストゥーパの高さは約226cm、基壇の一辺は178cmである。ネパール暦1066年(紀元1946年)が記されている。

(28) 覆鉢部の四方には金剛界マンダラの四仏が坐している。その下には二重の蓮台があり、これを蛇が頭を北にして取り巻き、そして支えている。蛇の下には、金剛杵輪(vajrāvali)、火炎輪(agnyāvali)、輪環(cakrāvali)が続き<sup>(30)</sup>、これら全てを大きな蓮台が支えている。蓮台は皿を伏せた形の台によって支えられ、さらに頭を北に向けた蛇がそれを支えている。その下には八角形の段が二重にある。方形基壇の四隅には獅子が彫られ、各面の中央には、妃を抱く法界語自在文殊 Dharmadhātuvāgīśvaramaṅjuśri(東)、文殊?(南)、妃を抱くハーラーハラ観自在 Halāhalalokeśvara(西)、ヴァスダーラ Vasudhārā(持世、北)がいる。この基壇の下に段が設けられており、その四面の中央には尊格が彫られていたに違いないが、不明である。

このストゥーパの構造は基本的なものの一つである。高さは約172cm、最下段の一辺は129cmである。建立の年は記されていない。

(29) 平頭より上は欠損しているが、構造は(4)のストゥーパに近い。しかし、覆鉢部の四方に四仏が配されており、その下には龕に納められた仏はいないという点で(4)と異なる。大小の屋根のような張り出しの下には、四人の観自在が一人ずつ四方に立っている。すべて、右手で与願印、左手で施無畏印を示し、その両手には蓮を持っている。このストゥーパの高さは約123cm、基壇の一辺は119cmである。建立の年は記されていない。

(30) ヒンドゥー教のシヴァ・リングを思わせる形をしている。平頭以上は破損して、現存しない。覆鉢の下では四方に龕がみられるが、その中には尊格はなにもない。覆鉢と龕とを合わせた丈は48cmであり、これらの下には厚さ10cmの方形段が続く。この段の下は基壇である。

このストゥーパの構造は基本的なものの一つである。高さは約67cm、幅は58cmである。建立の年は記されていない。

(33) このストゥーパは(15)と同型であるが、やや小型である。基壇の東面にはハリハリハリヴァーハナ観自在 Hariharivarivāhanalokeśvara を中央にして右にマハーカーラ、左にヴァスダーラーがいる。南面には一面(?)六臂で遊戯坐の尊格が、西面には法界語自在文殊(?)がいる。北面にはナーマサンギーティ Nāmasaṅgīti(名等誦、文殊)がいる。ストゥーパの回りには木の柵があり、上には燈明のための皿が並べられている。ストゥーパの高さは約203cm、基壇の一辺の長さは155cmである。ネパール暦950年(紀元1830年)の記録が見られる<sup>(31)</sup>。

(35) 小型のストゥーパであり、外観はシヴァ・リングを思わせる。平頭より上は欠損しており、覆鉢部の四方には四仏が坐している。その下の方胴部は四面それぞれに仏の立像を有している(写真41, 42, 43)。建立の年は記されていないが、かなり古いものであると思われる。この

ストゥーパの構造は基本的なものの一つである。ストゥーパの高さは75cm、基壇の一辺は35cmである。

(36) このストゥーパは(4)と同じ構造をしている。但し、(4)の方胴部の四面に立つ仏及び観自在の代わりに、このストゥーパの覆鉢部の四仏と同じ仏が龕の中で坐している。ストゥーパの高さは約182cm、基壇の一辺の長さは122cmである。建立の年は記されていない。

(41) ジャナ・バハ中で最も古いストゥーパとされ、カナカ・チャイトヤ Kanakacaitya と呼ばれる<sup>(32)</sup> (写真44)。覆鉢部のみが現存し、その頂上には小さくて黒い突起物がある。覆鉢の南面にのみ宝生が坐しており、他の仏はいない。三重の段によって支えられている。南面にはブロンズでできた獅子が両脇にいる。このストゥーパの構造は基本的なものの一つである。高さは約100cm、回りにある鉄柵の台となっている部分の東西の長さは140cm、南北は190cmである。

(42) このストゥーパの構造は(4)に近い。但し、覆鉢の下にある仏龕は(4)のものより装飾が複雑であり、その下の屋根のような張り出しは一重のみである。また、(4)の方胴部下部の仏及び観自在の代わりに、四面全てに仏が立っている。東と北の仏は右手で与願印を示し、左手で払子を持っている。(南の仏は不明。)西の仏は右手で胸の位置に払子を持ち、左手で与願印を示している。高さは約100cm、方胴部の下の段の一辺は51cmである。建立の年は記されていない。

(43) 外見は(4)のストゥーパに近い。覆鉢部の四方には四仏が配され、三重の蓮台が続く。その下には頭を北に向けた蛇が蓮台を取り囲むようにしている。この蛇の四方には、両手に蓮を持ち、右手で与願印、左手で施無畏印をした四仏の妃ターラーが現れる。屋根に似た張り出し部分が二重になっており、その下の方胴部の四面には仏と観自在が立っている。東の仏は右手で与願印を示し、左手で払子を持っている。(南の観自在の両手は不明。)西の観自在は右手で与願印を示し、左手で蓮を持っている。北の観自在は両手に蓮を持っているが、右手で与願印を示している。このストゥーパの高さは約193cm、基壇の一辺は128cmである。建立の年は記されていない。

(52) 最も新しいストゥーパであり、ネパール暦1092年(紀元1972年)に建立された(写真45)。覆鉢部の下には、西側のみにナーマサンギーティなどの尊格がみられ(写真18, 19, 20)、他のストゥーパのように四面全てに尊格を配するという四面を「見せる」ための構造はない。このストゥーパの構造は基本的なものの一つである。高さは約226cm、基壇の縦横は50cm(東西)と122cm(南北)である。

(53) 外見は(4)のストゥーパに近い<sup>(33)</sup>。覆鉢部の下に頭を北にした蛇がおり、その下に蓮台があり、そして、小さな張り出し部分が三重になって続く。その四面には龕に納められた四仏が坐している。その下には屋根のような大きな張り出しがあり、続く方胴部の四面には仏と観自在が立っている。東に立つ仏は右手で与願印を示し、左手で払子を持っている。南の観自在は両手に蓮を持って、合掌(?)している。西の観自在は蓮を持った右手で与願印を示し、左手で蓮を持っている。北の観自在は両手で蓮を持ち、右手で施無畏印を示している。このストゥーパの高さは約225cm、基壇の一辺は180cmである。基壇の南面右隅に不明瞭な碑文が残っている。



(55) 平頭以上の部分は欠損しているが、構造は(4)のストゥーパと同じである<sup>(34)</sup>(写真46)。基壇の東面中央には妃を抱いた法界語自在文殊がいる。その両脇には、坐して合掌している供養者が一人ずついる。ストゥーパの高さは約114cm、基壇の一辺は77cmである。建立の年は記されていない。

(56) 平頭以上の部分は欠損しているが、構造は(4)と同じである。方胴部の仏と観自在は(24)のストゥーパと同じである。但し、北面の観自在のみ合掌している。このストゥーパの高さは約142cm、基壇の一辺は116cmである。建立の年はネパール暦909年(紀元1789年)である<sup>(35)</sup>。

(57) 構造は(4)と同じであり、方胴部の東面には右手で与願印を示し、左手で扠子を持つ仏が立っているが、他の三面には両手に蓮を持ち、右手で与願印をした観自在が立っている。南面の観自在の右手には蓮がないが、修復の跡がみられるので、蓮があったと考えられる。基壇の四面の中央には蓮が描かれている。このストゥーパの高さは約200cm、基壇の一辺は135cmである。ネパール暦956年(紀元1836年)の記録がみられる<sup>(36)</sup>。

(58) 構造は(20)のストゥーパと同じであるが、このストゥーパの方が緻密な装飾が施されている(写真47)。方胴部の東、南、北の三面には仏が立ち、西面には観自在が立っている点で(20)と異なる。しかし、印相と持ち物はそれぞれの方角で(20)と同じである(写真49, 51, 53, 55)。(20)の南面の観自在の印と持ち物は不明であったが、このストゥーパの南面の仏は右手で施無畏印を示し、左手に蓮を持っている(写真51)。また、基壇の四面の龕に納められた尊格中、北面のもののみが(20)と異なる。北面では、右手で与願印を示し、左手で扠子を持つ仏が中央に立ち、その両脇には合掌する仏が一人ずつ立っている。このストゥーパの高さは約200cm、基壇の一辺は135cmである。建立の年は記されていない。

#### 4. 結 語

ジャナ・バハにあるストゥーパの建立年代は上で見たように不明なものが多いが、判明するもの11個のうち今世紀に建てられたものは7個である。また、19世紀に建てられたものは3個であり、18世紀に建てられたものは1個である。

バハの全てのストゥーパは、第3節で基本的構造を有するものとして言及された(3)(4)(5)(15)(20)(28)(30)(35)(41)(52)に代表される10のグループに分類できる。この分類については後に言及するが、バハのストゥーパは外見に基づくネパールの伝統的なストゥーパの分類法によっても分けられうる。カトマンドゥにある仏教寺院 Mantrasiddhi Mahāvihāra に住む Ratna Kajee Vajracharya 氏によると、伝統的には以下の32種類のストゥーパがあるとされている。

1. dharmadhātucaitya
2. vajradhātucaitya
3. jalāhayoparijinalaṅkṛtaçāitya
4. dharmadhātujinalaṅkṛtaçāitya
5. aśokaçāitya
6. śikharkaṭaçāitya

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| 7. aṣṭakonākṛtacaitya                                 | 8. bodhicaitya                   |
| 9. layanacaitya                                       | 10. ramyakūtaṅgāracaitya         |
| 11. bimbacaitya                                       | 12. stambacaitya                 |
| 13. dhātucaitya (kaccacaitya)                         | 14. caturvyūhacaitya             |
| 15. uṣṇīṣavijayadharmapāraṅgatacaitya                 |                                  |
| 16. uṣṇīṣavijayadharmapāraṅgatakuṅgāracaitya          |                                  |
| 17. manjuśrismṛticaitya (āryanāmasaṅgīsmṛticaitya)    |                                  |
| 18. vedikoparikuṅgāracaitya                           | 19. ratnacaitya                  |
| 20. ghaṇṭākāracaitya                                  | 21. saptapadmāsanaicaitya        |
| 22. padmaparijinālaṅkāracaitya (padmajvalāvalicaitya) |                                  |
| 23. vimbaicaitya                                      | 24. cāradhānaicaitya             |
| 25. ghaṭakūṭacaitya                                   | 26. dvitalesaptapadmāsanaicaitya |
| 27. chatrakāracaitya                                  | 28. namobuddhacaitya             |
| 29. śrilaṅkācaitya                                    | 30. maṅgaladvāracaitya           |
| 31. kanakacaitya                                      | 32. kūtaṅgāracaitya              |

この32種の中で、11種がジャナ・バハに見いだされる。この11種に基づいてバハのストゥーパを分類すると以下のごとくである<sup>(37)</sup>。

|                              |   |
|------------------------------|---|
| dharmadhātujinālaṅkṛtacaitya | (3) (19) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27)                       |
| śikharkūṭacaitya             | (4) (8) (12) (13) (16) (17) (18) (29) (36) (53) (55)<br>(56) (57) |
| aṣṭakonākṛtacaitya           | (5)   |
| bodhicaitya                  | (15) (33)   |
| ramyakūtaṅgāracaitya         | (20) (42) <sup>(38)</sup> (58)                                    |
| padmajvalāvalicaitya         | (28)  |
| ratnacaitya                  | (30)  |
| caturvyūhacaitya             | (35)  |
| kanakacaitya                 | (41)  |
| kūtaṅgāracaitya              | (43)  |
| āryanāmasaṅgīsmṛticaitya     | (52)  |

上記の伝統的な11種に基づいてストゥーパを分類した場合と、第3節で見いだされ、第4節の冒頭で示された10種に基づいて分類した場合の違いは以下のごとくである。第3節では、(42)のストゥーパは(4)のストゥーパに近い(4のストゥーパのグループに属する)と述べたが、伝統的分類では(20)と同じグループに分類される。(43)も第3節では(4)に近いと述べたが、伝統的分類では独立のグループに属すると見なされる。

構造の観点からみるならば、バハに於ける全てのストゥーパの覆鉢部以上は小さいが、下の基

壇部分は大きく、装飾の中心となっている。ratnacaitya と caturvyūhacaitya 以外のストゥーパの相輪・覆鉢・基壇部分には、金剛界マンダラの四仏や<sup>(39)</sup>そのシンボル、そして、金剛薩埵が現れる。このことは、ネパールにおいて金剛界マンダラがよく用いられたという事実に相応している。

バハで多数を占める (3) に代表される dharmadhātujinālankṛtacaitya、そして、(5) の aṣṭakonākṛtacaitya、(28) の padmajalāvalicaitya、(43) の kūṭāṅgākacaitya には蛇が現れる。この蛇はすべて北を向いている。神話学的には、蛇は水と深い関わりがあり、水の精、水界の支配者と見なされるが、脱皮をして若返るところから、生を繰り返す永遠性の体现者とも見なされる<sup>(40)</sup>。

このように、バハのストゥーパには、再生・永遠性という宇宙論的シンボリズムをになう蛇を有するものが少なくない。また、第2節で言及したように、ストゥーパは、退化してはいるが宇宙卵を表象する覆鉢、聖壇を表象する平頭等を有する。つまり、ストゥーパはインド以来の宇宙論的シンボリズムを担っている。それに加えて、平頭に描かれた眼から推定されるように、定に入った仏をも表象するという機能を担っている。そして、この機能は仏のチャクラにまで及ぶ。つまり、ストゥーパは、下位から上位へと高まり、ついには悟りに至るまでの諸々の心的状態を表すというシンボリズムをも有する。このようなシンボリズムは、特定の個人や家というような「個」と結び付かないものであるが、バハのストゥーパは、それとは対照的に、「個」を表すという機能をも有している。バハのストゥーパは、遺骨が納められていないにもかかわらず<sup>(41)</sup>、建立した家、或は一族に帰属し、寺には帰属しない。この点で、日本の「墓」に近いものであり、「家」の意識と強く結び付いている。これはインドのストゥーパには見られなかったことであり、ネパールのストゥーパの大きな特徴である。

## 註

- (1) [Locke 1980: 137-142]
- (2) ネパールのストゥーパを扱った主なものには次のものがある。[Snellgrove 1961: 93-101] [Pruscha 1975: 33] [Govinda 1976] [von Kooij 1978: 19-20] [Dallapiccola 1980] (この文献はネパール以外のストゥーパも扱っている) [Slusser 1982: 149-154] [高岡 1984: 107] [立川 1984] [立川 1985] [Josephson 1985] [立川 1987: 22-25]
- (3) [Govinda 1976: 5-6]
- (4) [Govinda 1967: 6] [Slusser 1982: 153]
- (5) [立川 1984: 73] チベット仏教におけるチャクラについては [Govinda 1960: 178-186] 参照。
- (6) [Govinda 1976: 6]
- (7) 紀元前100から紀元後100年の間に成立したとされる『八千頌般若経』では「ストゥーパ」と「チャイトヤ」は同義で用いられている [梶山 1974: 81-86, 325 (註80)]。
- (8) [杉本 1984: 84-108]
- (9) [Apte 1936: 32]
- (10) [宮治 1979: 97-98]

- (11) [宮治 1981: 52-59]
- (12) [宮治 1981: 75-76]
- (13) [山本 1967: 19] [宮治 1981: 144]
- (14) 十字型をしている。
- (15) Ratna Kajee Vajracharya 氏によると、釈迦牟尼 Sākyamuni であるとのことである。
- (16) Ratna Kajee Vajracharya 氏によると、弥勒菩薩 Maitreyabodhisattva であるとのことである。
- (17) ネパールでは四人の妃はすべてターラー Tārā と呼ばれている。しかし、多くの場合、阿闍の妃は  
仏眼仏母 Locana, 宝生の妃は我母 Mamaki, 阿弥陀の妃は白衣明妃 Paṇḍarā または半拏羅縛悉尼  
Paṇḍaravāsini, 不空成就の妃はターラー (多羅母) である [立川 1987: 97-100]。
- (18) 通常は、増長天は南、持国天は東、毘沙門天は北、広目天は西に位置する。
- (19) [Zhāng 1985: 84]
- (20) ジャナ・バハのストゥーパの観自在は手に蓮を持っているので、蓮華手菩薩 Padmapāṇi であるか  
も知れない。
- (21) Locke はストゥーパにネパール暦950年 (紀元1830年) が記されているとしている [Locke 1980: 141]。
- (22) Locke はストゥーパにネパール暦1051年 (紀元1931年) が記されているとしている [Locke 1980: 141]。
- (23) Locke はストゥーパに年が記されていないとしている [Locke 1980: 141]。
- (24) Locke はストゥーパにネパール暦1063年 (紀元1943年) の記録を報告している [Locke 1980: 141]。
- (25) 註 (17) 参照。
- (26) Locke はネパール暦1090年 (紀元1970年) の記録を報告している [Locke 1980: 141]。
- (27) Locke はネパール暦1070年 (紀元1950年) の記録を報告している [Locke 1980: 141]。
- (28) Locke はネパール暦1066年 (紀元1946年) の記録を報告している [Locke 1980: 141]。
- (29) Locke はネパール暦1032年 (紀元1912年) の記録を報告している [Locke 1980: 141]。
- (30) ジャナ・バハに住む Purna Ratna Bajracharya 氏の説明によった。
- (31) Locke はネパール暦946年 (紀元1844年) の記録を報告している [Locke 1980: 142]。
- (32) このストゥーパの写真は [von Kooij 1978: Pl. VI] にもある。
- (33) このストゥーパの写真は [立川 1987: 24] にもある。
- (34) Locke はこのストゥーパの存在を報告していない [Locke 1980: 140, 142]。
- (35) Locke はネパール暦807年 (紀元1688年) を報告している [Locke 1980: 142]。
- (36) Locke はネパール暦893年 (紀元1773年) を報告している [Locke 1980: 142]。
- (37) 最初にあげた番号のストゥーパのみが, Ratna Kajee Vajracharya 氏に同定をお願いしたものである。
- (38) (20) とともに (42) も Ratna Kajee Vajracharya 氏に同定をして頂いた。
- (39) ジャナ・バハ在住の Purna Ratna Bajracharya 氏によれば、覆鉢の回りに四仏が現れる場合、大日  
如来は覆鉢によって表されている。
- (40) [杉本 1984: 394-395] インドにおけるストゥーパと蛇の関係については [杉本 1984: 394-403] を  
参照。
- (41) Ratna Kajee Vajracharya 氏によると, Mantrasiddhi Mahāvihāra の中庭には遺骨を含むチャイト  
ヤが二つあり, それは Siddhahaṛṣa と Vajrahaṛṣa のためのチャイトヤであるとのことである。このチャ  
イトヤの寺院の中における位置については [島 1984: 85] を参照。

付記 この報告書のもととなった調査をするにあたって Ratna Kajee Vajracharya 氏と Purna Ratna Ba-  
jaracharya 氏のご協力を得ることができました。また、名古屋大学助教授宮治昭氏には、尊容に關  
する質問に答えて頂きました。ここに謝意を表します。